

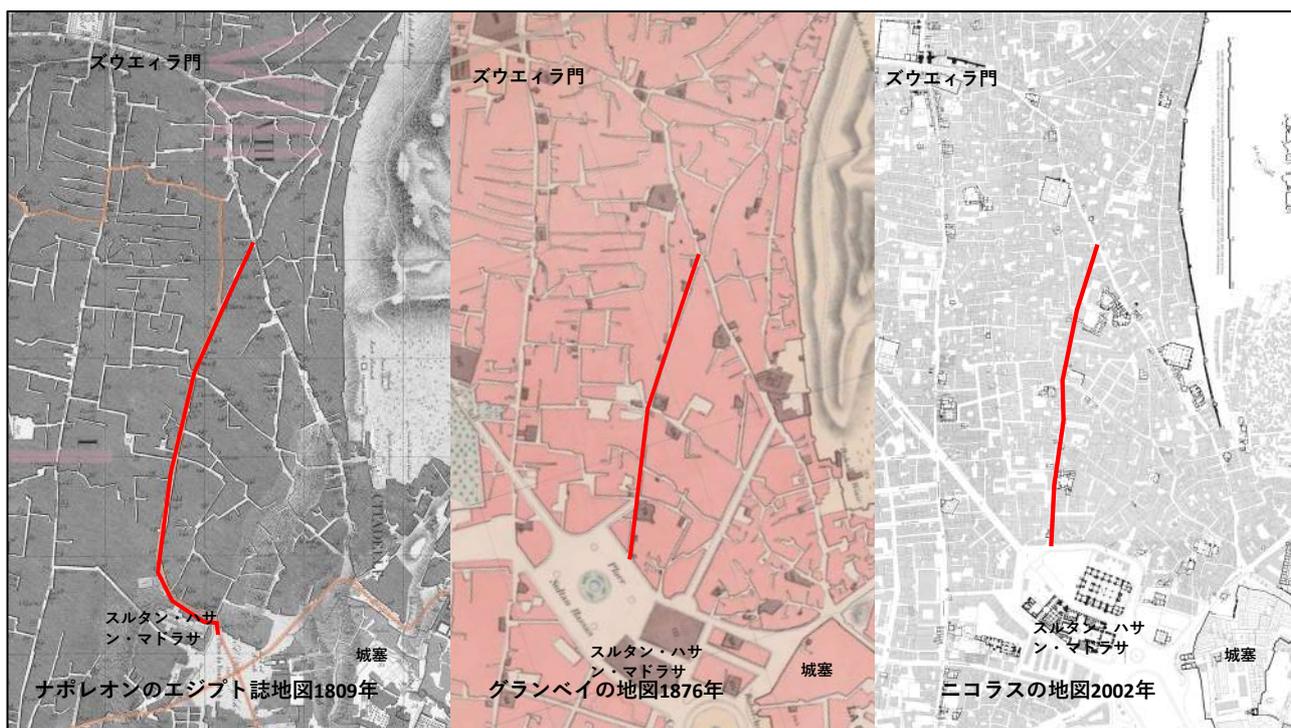
■ 2. 検討（評価、建築基準、現況調査）

① スーク・シラーハと保存案対象建物

スーク・シラーハは、歴史的建造物の存在と、マクリーズィーの記述からも、14世紀にさかのぼる通りである。本報告書で触れてきたように、筆者たちは2016年からそこにあるバイトヤカンにおいて住民の意識覚醒の活動を続けてきた。その一環として、2017年には本プロジェクトに参加する布野教授の主導で、日本大学とカイロの大学で建築を学ぶ学生たちと、未来のスーク・シラーハを考える共同ワークショップを開催したことがある（その詳細は、■ 4. エジプト行政（NOUH）関係者へのオンラインレクチャーの布野資料に掲載）。これを踏まえて、今回のプロジェクトでも、現在活用されていない歴史的建造物を活用することによって、スーク・シラーハの発展を目指す可能性を模索することとした。その際、住民ワークショップを通して彼らの希望を聞き、それを踏まえた上でアラール教授のスーク・シラーハのデザインコンセプトと、サラール教授の実際の活用案のデザインを提出してもらうこととした。なお、二人にはワークショップでのファシリテーターを依頼し、住民の意識との乖離がないように務めた。

マクリーズィーはズウェイラ門（カーヒラの南門）南側、城塞を繋ぐこの道のことをスーク・シラーハ（武器市場通り）とは呼ばずに、スウェイカ・イZZィー（イZZィーの小市場）と呼ぶ。ズウェイラ門南側の地域は、ファーティマ朝期にはカーヒラ城外の墓域であった。マムルーク朝期には、ズウェイラ門と城塞、さらには南のイブン・トゥールーン・モスクを繋ぐ道にそって、アミールたちの邸宅や彼らの寄進公共建築が建設され、新興市街地として開発され小市場が開かれた。オスマン朝期になると、城塞との関係から、おそらく武器を売買する市場が作られるようになったことが推察される。

19世紀初頭のナポレオン地図には、通りの南部にはスーク・シラーハ、通りの北部にはスーク・イZZィーの名称が記載されている。この地図から、本来は、城西下のルメイラ広場から、マムルーク朝の大建築スルタン・ハサン・マドラサ（学院）北側沿いに道が通り、現在のスーク・シラーハの入口とも言えるマンジャク邸の前へと繋がっていたことがわかる。また、ナポレオン地図にはこの地域にフランス軍半旅団が2つ駐屯していたことが明らかで、トルコ人、キリスト教徒なども住む地域で、軍事的にも重要な地であった。



歴史的建造物にはいくつかの種類がある。イルゲイ・ユーズフィーがマムルーク朝下 1373 年に建設した宗教建築は、中庭周りの礼拝室と教室、小中庭を囲む学生や教授の居室、サビールと呼ばれる公共の給水施設、その上階に設けられたクッターブと呼ばれるコーラン学校、創設者の墓廟などが一体化した複合建築である。しかしながら、現在では礼拝のためにモスクが使われているだけで、サビール・クッターブ、小中庭周りの居室部分、墓廟は普段は鍵がかけられ使われていない（下左平面図橙色部分）。スーク・シラーハの北部にあるクトゥルブガー・ダハビー・マドラサ（1347 年）は、礼拝室は狭く、そこには創立者の墓（セノタフ）も置かれているが、その隙間の空間は礼拝に用いられる。しかし、現政権になってからは日に 5 回の礼拝時以外は、不要不急の集会を防ぐ目的からモスクでさえも礼拝時間以外は閉ざされ、2020 年のコロナ禍によりその状況はさらに強まった。



イルゲイ・ユーズフィー（青は無蓋、橙は未使用）

クトゥルブガー・ダハビー

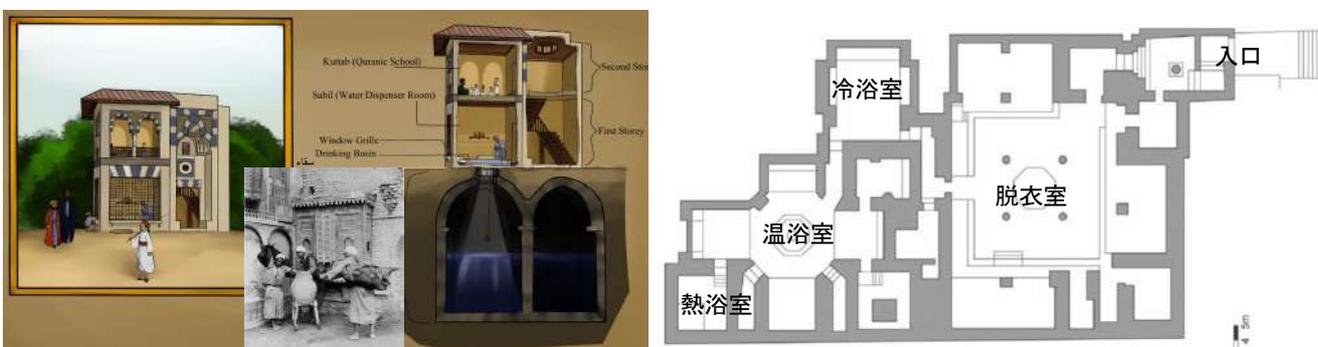
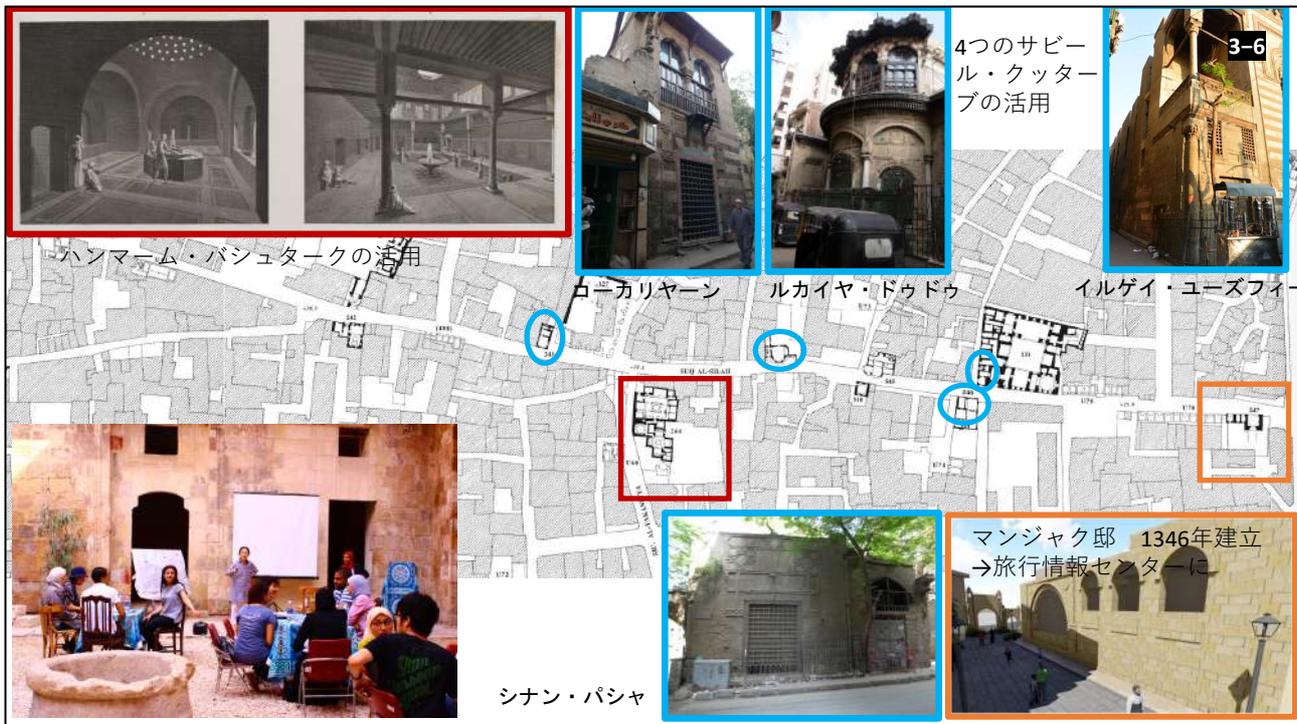
モスクではないが、聖者廟も宗教施設で、本来は信者や教団の人々を集めていた。特に聖者の生誕祭（マウリド）には祝祭が催される場で、共同体の靱帯として役立っていた。しかし、今はその役割を終えた例も多く、スーク・シラーハにあるリファーイー教団のアブー・スード廟もその一つである。宗教建築は、本来では他の建物への転用を停止する意味からワクフ（停止）とされるものの、通りの北部にある 2 つのザウィヤは、一つは壊され、もう一つの瀕死の状況にある。今回は、モスクや廟は再利用検討の対象としなかったものの、もう少し上手な活用法を考える余地はある。

ちなみにイスラームの歴史的都市施設運営のシステムとしてのワクフは、宗教建築と世俗建築を経済的につなぐものであった。モスクやマドラサ（学院）、サビール・クッターブ等の宗教的目的を持ちながら維持管理費が必要でお金を稼ぐことのない宗教施設に、公衆浴場や商館、あるいは店舗などお金を稼ぐことのできる世俗施設や農地などを寄進し、後者から上がる収入を前者が用いることで、両者が持続的に成立することを目指した。往時から管理者の独占など問題点も抱えるが、こうした施設間の関係性による持続的な運営は、今後の公共施設再利用に欠くことのできない視点であろう。

もう一つ、特色的な施設としてのサビール（給水所）・クッターブ（寺子屋）があり、この通りに 4 カ所を数える。本来のサビールは、地下貯水槽にナイル川から水を運んで貯水し、道ゆく人に水を供給し、上階に設置された開放的な部屋を、子供たちがコーランを学ぶ場所とする。マムルーク朝の 14 世紀からオスマン朝の 19 世紀中頃まで、カイロでは小規模ながら手の込んだ宗教寄進財として建設され、通りの顔となるが多かった。しかし、19 世紀末からの水道の普及によって、サビールがその役割を終えるとともに、ほとんどの場合、使われなくなってしまった。

まず、スーク・シラーハの入口にあたるマンジャク・シラフダール（太刀持ちのマンジャク、下図橙線囲い）邸の門は、この通りで最も古い建物の一つで、ファサードにはこの通りの象徴とも言える太刀（シラーフ）の紋章があることから、通りのメルクマールとなる建物と判断した。

通りの中央にあるハンマーム・バシュターク（下図赤線囲い）は4分の1ヘクタールあまりの敷地をしめ、元来の伝統的公衆浴場という機能から、スーク・シラーハ活性化の一翼を担うと判断した。

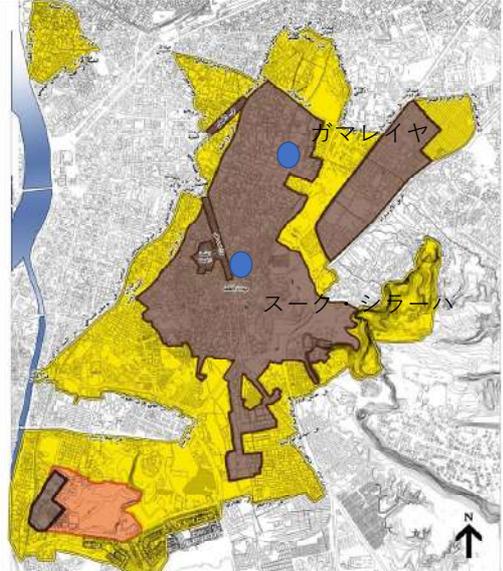


サビールの仕組み

ハンマーム・バシュターク

さらに4つのサビール・クッターブは、比較的小規模な建築で転用が容易であると判断した。先に紹介したイルゲイ・ユーズフィー・モスクに併設された例はその一つである。その対面にあるのはシナン・パシャのサビールで、本来はウィカーラ（商館）と同梱で建設され、今もその一部が残存し、昔日の街区門も残る。さらに北に進むとルカイヤ・ドウドウのサビール・クッターブがあり、半八角形の平面と波形の2階の軒が特徴的な美しい建築である。この建築は、現在小学校となった大邸宅敷地に付属していたもので、将来は小学校をも含んだ転用が期待される。さらに北に進むと、コーカリヤーンのサビール・クッターブがある。ここは本来現在のバイトヤカンの前身の住宅と、スーク・シラーハに面するウィカーラ・ラブアが同時に建設されたものであると推察される。バイトヤカンの入口前を共有していることから、公的な利用を推進する価値がある場所である。サビール・クッターブはいずれも瀟洒な建築が多く、通りをいく人々にアピールする建築である。

②コンサベーション建築基準（NOUH 手引書）（巻末資料に本文の全訳を掲載）



المناطق ذات القيمة المتميزة
القاهرة التاريخية

شكل (1) الحدود وظلال الحماية

حظا
مناطق العمل المخطط مع العمر الجديد
مناطق
مناطق

2008年法律第119号とその執行規則に従い「国家都市整備局」によって承認された歴史的なカイロ地域の境界と条件 2011 3-2

- 1.歴史的カイロの境界
- 2.一般的要件
- 3.都市組成
- 4.建物の解体と再建
- 5.建築上の特徴
- 6.新たな建築 高さ、仕上げ、突出部
- 7.2006年法律第144号に従って登録された既存建築 レベルA、B、C
- 8.既存未登録の建築
- 9.修復、改修、再建
- 10.用途と活用
- 11.店舗ファサード
- 12.植栽
- 13.歩道と道路
- 14.照明
- 15.歴史的カイロとヘディープカイロの重複エリア
- 16.手続き上の要件

せっかくの指針が使われていない状況
全てが特例状況→
もう少しわかりやすく図示するようにして活用を図る

計画当初は建築基準の設定を目論んでいたが、国立都市景観機構ですでに 2011 年に保全地域の建築基準書とも言える条件を提出していた。この作業にはエジプト側の参加者であるサラ教授も携わっており、説明的な写真や解説の図面を補うことによって、十分に活用できることが明らかとなった。アラビア語でしか提出されていなかったために、英語と日本語に翻訳することを試みた。

上述の 16 の項目にわたって注意書きがなされ、それぞれの条項の要点は、以下の通りである。

1. 境界には 3 つの区域；ゾーン A（上図茶色）、ゾーン B（同黄色）、ゾーン C（同橙色）がある
2. 一般的要件；建設、変更の不許可。工事には許可取得が必須。屋上附設物の不可視。
3. 都市組成；都市構造の保存。分割の不許可。境界線上に建設（隣接建築との空隙の不許可）。建物面積は敷地面積の 70%以下。建築の連続性。
4. 解体と再建；解体作業の申請義務。再建の場合の都市組成遵守。解体前の建物ファサード記録義務。
5. 建築特徴；地域との調和。開口部形状、色、使用材料。設備の不可視。
6. 建物高さ；ゾーン A、B①道路幅 10m 未満 3 階最高 10m②道路幅 10m 以上 4 階最高 13m、ゾーン C+3m 表面仕上、突出の規定
7. 2006 年法律第 144 号登録既存建物；3 段階の規制、改変付加、内部改変、ファサード改変
8. 未登録建物；5 の建築特徴を遵守
9. 修復、改修、再建；建築要素の再建、通り名の遵守
10. 用途と活用；有害な仕様の不許可
11. 店舗ファサード；ファサードの遵守。広告規定。
12. 植栽；幅 12m 以上の箇所で植栽許可。芝生や土壌の不許可。
13. 歩道と道路；幅 6m 以下歩道必要なし、6-20m 道路幅の 10%、20m 以上同 20%、障害者用傾斜路設置
14. 照明；幅 12m 以上の道路で 30m ごと、幅の狭い通りは建物壁に照明を固定。
15. ヘディープカイロとの重複エリアの規定
16. 手続き上の要件；国立都市景観調和機構の承認を得る義務。

③カイロ歴史的市街地の現況調査と評価：ダルブアフマルに注目して

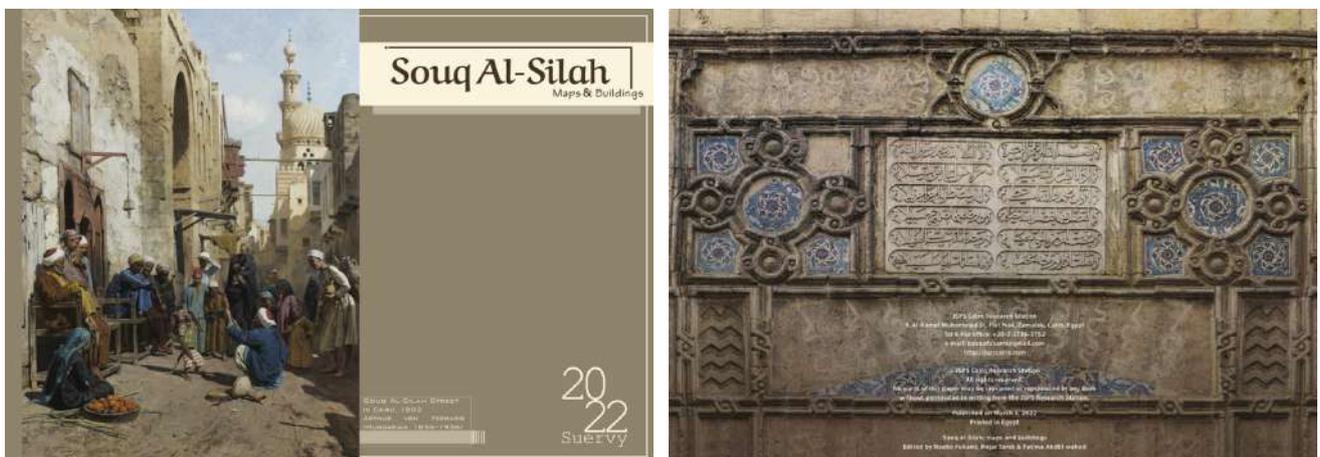
いくつかの地図の存在を指摘したが、現在の詳細地図を手に入れることは難しい。Google Earth 等の衛星写真を用いたものは、建物が高いカイロ旧市街向けではなく、影によって実態を掴むことができない。ニコラスの地図は、1938年地図を基盤に修正を加えたものだが、ここ20年間の変化は大きい。また、2017年に布野教授率いる日本大学の学生たちが、ニコラスの地図上に、その階数や用途を記入したものがあったが、調査期間が短かったため、不備な点も多い。このような事情からニコラスの地図をベースに、現状を記述することが必要と考えた。未登録の歴史的建造物の遺構の指摘も目的とした。調査は、柏木（太陽の船）、檜山（日本設計）、筆者深見（JSPS カイロ研究連絡センター）および、ユナイテッド・コンサルタンツ United Consultants 所属の建築家ファーリス、イマード、ハーガル、ファーティマによって、12月17日から2月25日まで8回に渡って行い、日本の街並み調査で培われた技法をエジプト人建築家に伝えた。

現地調査 4-6

柏木、檜山、深見担当 12月17日から開始、12月24日、25日にも開催予定 住民説明用のパンフレット

1) 利用状況（建物の有無） 2) 建物状況（階数、入口） 3) 古建築のチェック（石積み、持ち送り等）
4) 公共建築、店舗、駐車場等の場合には書き込む 5) 1軒ごとにファサード写真撮影

その一つの成果として、小冊子をまとめるに至った。建築家ハーガル、ファーティマの協力のもと、筆者がまとめた。エジプト人建築家と日本人研究者がともに参加し、写真撮影、地図の修正などを通して、現状を的確に捉えることが必要と考えたためである。また、若い建築家に旧市街保全の意識を喚起し、問題点を共有し、今後も彼ら自身で旧市街悉皆調査に取り組むことが望まれる。

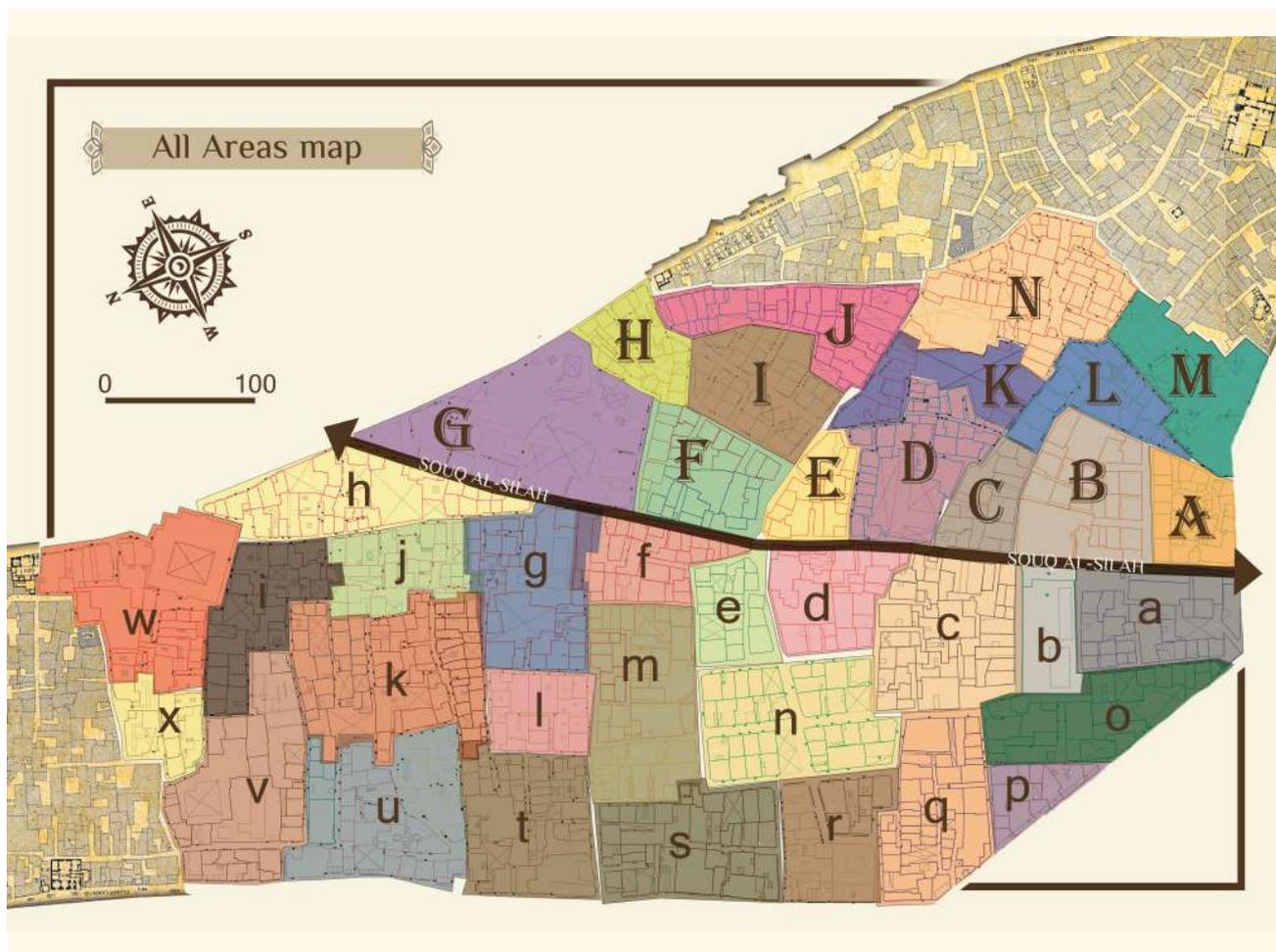


この調査によって、明らかになった課題も数多い。以下に、調査報告書の序の和訳を引用する。なお、他の部分については巻末資料集にその和訳と図版を収録した。

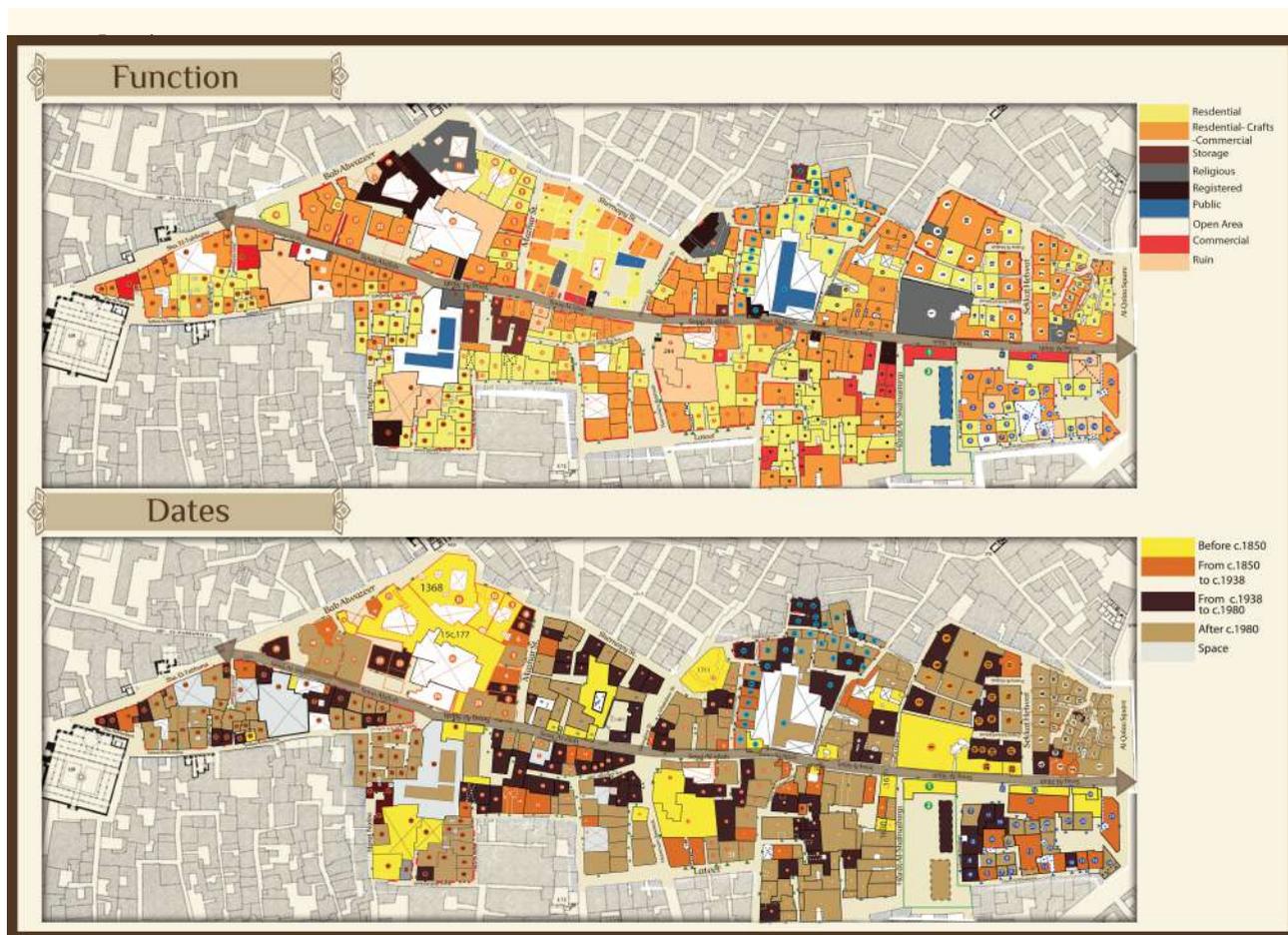
カイロ旧市街の地図については、ニコラス・ワーナーNicholas Warner 著『歴史都市カイロのモニュメント-地図と記録総覧』The Monuments of Historic Cairo; A Map and Descriptive Catalogue の地図を元に、現在空地になってしまっているところ、新たな建造物が開発されたところなどを、一軒一軒、写真撮影をしながら地図の補正を行なった。加えて、目視およびインタビューにより、建物機能、階数、年代判定、躯体材料などをチェックした。

まず、ダルブ・アフマルー帯にこの調査を試みるにあたって、区域区分が必要になったので、仮の区分を行なった。スーク・シラーハの西側に a から z、①から④計 30 エリア、スークシラーハの東側に A から W までの 23 地区を設定、ほぼ全ての地域を調査した。下図は、その中でも 3 月末までのレポートをまとめるにあたり、調査によって補正を行なうことのできた部分である。ちなみに、なるべく街路によって分けることができる建物の塊を基準に分けたが、ところどころでは建物の塊を分断したところもある。街区としての塊の検討は今後の課題である。

本小冊子では、この区分に従い、それぞれの地域ごとに、その成果をスーク・シラーハ沿いの地区に限って、地図のページと写真のページとしてまとめた。掲載の順序は、スーク・シラーハの西側南端の a からはじめ北端の h、スークシラーハ東側の G から南端の A までという順序である。地図のページについては、まず地域の現状を表す地図（それぞれの建物に番号をつけ、入口を記入したもの）、ニコラスが基盤とした 1938 年測量の地図を掲載し、それぞれ建物機能、建物高さ、建設年代、躯体材料の地図を掲載した。それぞれの判断基準については以下のとおりである。



建物機能については、建物が上階をアパートメントとし、1階に店舗や工房、あるいは倉庫としているものが大半を占める。なお、それら1階部分の用途判別は、閉まっている場合等は難しいため、1階にシャッターなどによって閉じられた空間がないものを居住 Residential、1階に何らかの外に向かって開く個別の空間のあるものを居住／工房／商業兼用 Residential-Crafts-Commercial とし、倉庫だけと判別可能なものを倉庫 Storage と判断した。上階にアパートメントを持たずに、店舗や工房だけの建築は、商業用 Commercial と表記した。モスクや墓、ザウィヤ（小モスク）などを宗教用 religious、学校や病院などを公共 Public とし、観光考古省に登録されている歴史建築を特記 registered として色分けした。なお、駐車場など全くの空地になっているものは空地 open area、遺構が荒廃した状況で残っているもの荒廃 ruin と類別した。ただし後者の場合、その中に仮設の住居や工房などが入り込み、使われている場合もある。

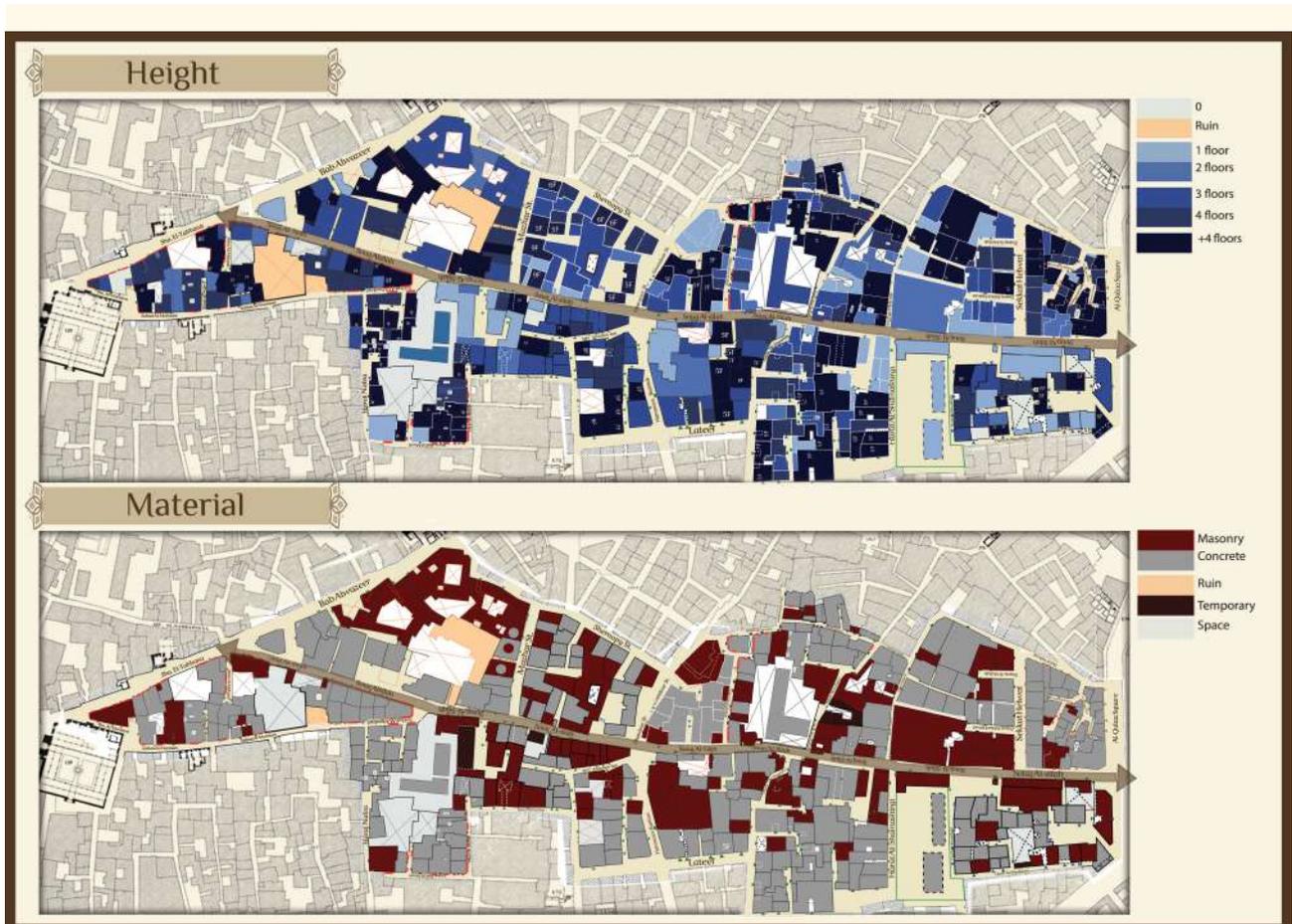


建物の年代判定においては、それぞれの建物の様式によって区分するとともに、1938年地図との比較からその概要を判別した。1850年以前のものについては、マムルーク朝やオスマン朝の様式が使われており、観光考古省に登録されたものは地図にその年代を書き込んだ。特に観光考古省に登録されていないものについては、石造持ち送り、壁の石積みなどをその判断基準とした。1850年から1938年については、様式の中にヨーロッパ風の意匠が入り込むこと、1938年地図の敷地との整合性などを判断基準とした。1938年から1980年については、1階に切石積みを用いて、2階以上を鉄筋コンクリートとするもの、入口やバルコニーの様式などから判断を試みたが、70年代、80年代の完璧な区別は困難を極める。特に比較的質素な建築においては、1980年という時代が特に意味を持たない場合もあるように思われ

る。しかしながら、カイロが1979年に世界遺産に指定され、1981年からサダト政権がムバラク政権に変わったことも重要な転機と考え、1980年に境界を設定し、区分を試みた。

建物の高さについては、階数によって色分けした。ただしモスク等の歴史的建造物では、非常に天井高が高い場合もあり、また近年のアパートでは階高が低いので、絶対的な高さではない。4階以上のものについては地図にその階数を書き込んだ。

躯体の構造材については、組積造 masonry と鉄筋コンクリート concrete、仮設建築 temporary を採用した。組積造は多くの場合、切石造であるが、鉄筋コンクリートを併用しないで煉瓦積みだけのものもこの範疇に入れた。



写真ページについては、地図に記入した番号を振って、それぞれの敷地に少なくとも1枚の写真を掲載するようにした。歴史的建造物として重要なものに黄色のマークを、価値のある建物にオレンジ色の囲いをつけた。また、小冊子をまとめるにあたり、特に都市の歴史を考える上で、ニコラスが基盤とした1938年地図との比較が重要であると考え、比較の記述、およびその区域の歴史的建築の指摘を行なった。なお、掲載のないエリアについても、同様な調査を行っており、それらを含めたまとめは、今後の課題である。補足資料として、当該部分のナポレオン地図の情報、およびバイトヤカンの説明を加えた。(巻末資料集参照、サーベイ・レポートの引用はここまで)

現況調査から明らかとなった点は以下の通りである。建物高さは、先述した建築基準と比較すると、4階以上の建築が1980年以後、特に近年の2011年の革命以後と目される建築に数多く存在する。建築基準としては明文化されていても、遵守されていないことは明らかである。しかし、本調査は違反建築の摘発のための調査ではなく、あくまでも現状の記録という姿勢を貫きたい。むしろ本調査によって明

らかにしたいことは、例え観光考古省の登録建築であって、その全てが登録されていないこと、また登録に値するような歴史的建造物が、崩壊するがママに残されてしまっていることである。前者は、本事業で住民に今後の活用法を住民とともに考えたハンマーム・バシュタークに明らかである。マムルーク朝にさかのぼる入口だけが登録され、他の脱衣室、冷浴室、温浴室、熱浴室、焚き口の部分は崩壊のままに任されている。さらに焚き口部分は、その上階にいわゆる一時的な部屋が作られており、貧しい人々がゴミ処理等をしながら、トイレも共同で暮らしている。こうした荒廃は、後者の未登録の場合にも指摘できる。調査地域では、とりわけ1938年地図に大敷地区分で表された敷地で、部分的に古い建造物が残っている場合にも、同様な状況を数多く指摘することができ、大きな問題点であることを指摘したい。

もう一つ、都市組成の遵守／逸脱という点での知見も得られた。建物の建て替え等は、所有者ごとに行われてきたようである。20世紀初頭からのおそらくエジプト共和国成立くらいまでは、巨大規模敷地にグリッドでの開発が、スーク・シラーハ通りのハンマーム・バシュタークの南側バイトヤカンの東側で見られ、これはむしろヨーロッパ的な要素が入ってきたものとして今では歴史的存在になりつつある。ナーセル時代には国立アパートの建設や、主要通りのセット・バックが見られると同時に、1980年代頃までは大規模敷地の開発に、袋小路が用いられていた点は興味深い。20世紀前半のように巨大敷地の開発がおこらずに、所有者ごとの開発のために生じたのかもしれない。しかしながら、21世紀になると敷地を統合して、巨大なアパートメントを建設する事例も見られ、この状況が続くと、歴史的都市組成は取り返しのつかない状況に陥っている。

何度も述べたことではあるが、カイロ旧市街の都市遺産としての蓄積は、数百年をさかのぼる建築物に加え、その街路網の古さにある。歴史建築の面する通りが、ほとんどそのままの形で残っているのである。それは、200有余年をさかのぼるナポレオンの詳細地図によっても証明される。

しかしながら歴史の経過とともに、都市の運営も変化し、人口が増加し、さまざまな不具合が生じていることも確かである。歴史をもとに戻すことはできないが、歴史の経過としての現在を記録し、そこから何かを学び取り、未来への手立てとすることは可能なのではないだろうか。未来のスーク・シラーハが、その歴史の刻印をどこかに維持し、そこに住む人々が誇れる街になってほしいと切に感じている。

なお、残念なことではあるが、本調査の期間中、スーク・シラーハの近傍ダルブ・ラッバーナ（牛乳屋街）では、世界遺産のコアゾーンにあるにもかかわらず、登録歴史的建造物をのぞいて全ての住宅や街路が撤去された。このような乱暴な開発は、今後再考せねばならない点であることを強調したい。



コーカリアーン



スーク・シラーハ通り



ルカイヤ・ドウドウ